

教 仏 名 聞

第6号
(発行日)

2011年3月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○共学会—毎月6日午後7時始

○真宗入門講座—毎月18日

午後6時半始

*8月22日の同朋の会と8月

12日の念仏座談会はお休み

経典と重んじる

こうした経典に
説かれた真理は、
お覺りを開かれた
仏陀がお説きなつ

る内容の処は、私たちのレベ
ルにまで仮に降りて下さった
内容であつて、真実そのもの
ではなく、真実へ至る教育的
手段として説かれたものであ
る場合が多いのです。

仏教の経典が他の書物と異
なる特徴は、仏陀すなわち
覺りを開かれたお方が説かれ
た、その内容が記述されてい
ることです。仏陀とは真理に
目覺めたお方という意味です
から、真理に目ざめたお方が
真理と真理に至る方法、そし
て真理にそつた生き方とはど
ういう生き方かなどを説かれ
たものが〈お経〉だと言えま
しょう。

近では文化大革命の時、多く
の寺は破壊され、仏像はつぶ
され、経典は焼かれ、沢山の
僧侶は迫害されましたが、そ
れから四十年あまり経つた今
日、仏教はまた復興しつつあ
ります。昨年、北京に行き、
大きな書店に入りましたら、
仏教書ばかりの棚(六段)が
四つもありました。文化大革
命の時は仏教は三毒教といわ
れ、人民を惑わす毒であると
批判されていたのです。

このように何度も弾圧され
排斥されても、復活してくる
のは何故でしょうか。それは
仏教は時代を超えた永遠の真
理を説いているからではない
でしょうか。

今日も多くの本が次々と出
版されますが、百年以上も人
に読み続けられている本はご
く少ないと思います。しかし
経典は二〇〇〇年以上たつて
も各国で読み続けられていま
す。このようにして伝えられ
てきた経典に対して私たちは
もっと信頼をしたいと思います
のではないでしょうか。

たものですから、迷える凡夫
には読んで直ぐに了解できる
ようなものでは当然ありません。
かといって全然理解でき
ない内容であれば、私たちは
とりつく島がありません。そ
こで仏陀は迷える衆生が学ん
でいくなら分かるように工夫
されて説かれています。それ
を善巧方便と申します。

分かる部分から導いて、直
ぐには深い道理は分からない
けれども、善巧方便によつて、
次第に覺りの内容を受けとる
ことができるようになってい
ます。

ですから経典は、読んで分
かる部分と分からない部分
があり、初めは分からない部分
に戸惑うことが多いのは、経
典自身に問題があるというよ
り、読む私たちに迷いの心が
深いからです。

そういう点から言えば、凡
夫の私たちにとつてはお経の
内容で分からない部分にこ
そ、深い真理が説かれている
ともいえます。
逆に、私たちが読んで分か

ですから、お経の話を聞いて
分からなければ、それはお
経のせいではなくて、愚かな
私のせいであると思ひ、私に
はなかなか受け取れないけれ
ども、私の考えの及ばない深
いまことがここに説かれてい
るのだ、と受けとめることが
大事でありましょう。

それを「分からないのはお
経がつまらないから」といっ
て、それ以上に聞こうとしな
いのはせっかくなか仏陀の教えに
あいながらかえりみないよう
なもので、あたかも宝の山に
入つて手を空しくして帰つて
くるようなものだといわざる
をえません。

お経の話を聞いて分からな
いときは「私が愚かだから深
い道理が今は分からないけれ
ども、本当は私の今の考えで
は及ばない深いまことが説か
れているのだ」と受け取り、
経典に対する信頼をさらに強
めてほしいものです。そうす

例えば、お隣りの中国では
仏教がインドから伝わつて二
〇〇〇年ほどになります。そ
の間四度も五度も仏教教団
への大弾圧がありました。最

も、なお読み続けられ、近年
では各国語に翻訳されて、世
界中の人たちに読まれていま
す。

ると自ずから仏の深い思し召しが知られてまいりました。

例えば『仏説阿彌陀經』に「これより西方に、十萬億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極樂という」と説かれています。

これを聞いて「この宇宙の中に、どこにそんな世界があるのか。こんなおとぎ話のような話は信じられない」と受けとり、耳をふさいで聞こうとしなければ、仏教で説かれている〈極樂淨土〉の深い意味は分かる筈はありませぬ。ですから「今の私にはよく分からないけれども、深い意味をおっしゃっているに違いない。私のいる世界を超えて極樂淨土と説かれるようなさとり領域があるのだろうか」と、このように仏法を素直に聞くとところから、深い仏法の世界に入っていけるであります。



念仏申
(C)SHOGAKUKAN
INC.

正信偈に学ぶ問答

(三十七)

弥陀仏本願念仏 邪見憍慢惡衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯

(書き下し文) 弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の惡衆生、信樂を受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。

(現代語訳) 阿彌陀仏の本願念仏の法は、よこしまな考えを持ち、おごり高ぶる自力のものが、信じることは実に難しい。難の中の難であり、これ以上に難しいことはない。

D 「ここで正信偈の依經段が終わります。すなわち大無量壽經の大意がこの文言で最後におさえられます」

G 「弥陀仏の本願念仏というのは」

D 「これは阿彌陀仏の本願の念仏のことです。阿彌陀仏は一切衆生を助けようとの願いを起こし、如何にすれば一切

衆生を救うことができるかを

私たちのために五劫という長い間ご思案下さったのであります。そして選び取られたのが称名念仏で、へたとえ十声でも一声でも念仏申す者、必ず淨土に生まれさせよう」と誓われました。こうした誓願のかけられている念仏ゆえ本願の念仏と申します」

G 「阿彌陀仏は称名念仏を選択して、これを淨土に生まれる行と誓われたのですね。これがなぜそれほど有難いことなのですか」

D 「ここに一切衆生を助けずにはおかないという無窮の大悲心が表されているからです」

G 「窮まりの無い大悲心はどのようなものでしょうか」

D 「これについて、多田鼎師の『大行論』の文章を、長いですが引用します。本願念仏の思し召しがよく表されていて、涙なくして読めませんね。多田師は真宗大谷派の名師で

す。

〈如来は何故に、たんに称名の一行を、我が救済の道として定めさせられたか。私どもからいえば、成程、道念も理智も、徳も愛も力も皆夫々に尊いものである。けれども私どもが如何にして之を持つことが出来るか。又如何にして之を發すことが出来るか。如何に齡を重ねても、我心些かも清まらず、我智少しも明らかにならぬ。徳、愛、力、真実のこれらのものが、我が生活の何処に見出さるるか。何時振りかえってみても、我が胸は常に雜亂しやむことがないではないか。この胸を抱いて、今にも来たるべき死の無窮の暗黒に入ることは、我として堪えられぬ。さればとてどうにもならぬ。世界一切の物を挙げ来たつても、自己全体の力を揮って来ても、この胸はどうにもならぬ。如何にもならぬからというて、どうとかせねばならぬ。如来之を見そなわせられたために、常並の者ならば、誰でも出来る称名の一行に、救いの道を開かせられた。如何にも称名の一行は、単純極まる。又浅はかであるともいえよう。けれども斯道ならでは、かれこ

れ言うておる私ども自身が、

實際は進み得られぬを如何にするか。死は今に我を襲うかも分らぬ。我心が如何にして充たさるるか。たとい千年の壽命を得ても、年愈々老い行きて、我徳愈々真に進むべき望みがいづこにあるか。ここにこの念仏の一道を開かせられたことは、誠に如来の深重なる特別の思惟のためであることを頂かねばならぬ。実に浅きは深きである」

G 「なるほど、この一文は〈我が名を称えよ、必ず助ける〉という本願の念仏のお心がよく伝わってきますね。法然聖人も親鸞聖人もこの念仏往生の願心に感泣されたのでしゅうね」

D 「だと思えます。ところがこの本願の念仏は〈邪見憍慢の惡衆生、信樂を受持すること、はなはだもつて難し〉と仰せられるのです」

G 「なぜこのお念仏の誓いを信じて(信樂)受け持つ(受持)ことははなはだ難しいといわれるのですか」

D 「邪見憍慢だからといわれるのです」

G 「邪見憍慢とは」

D 「邪見とは邪な考えという

ことで、反対は正見です。正見とは覚りの智慧で物事を正しく見る見方のことです。ですから迷いの心で見える見方は邪見であるといえます」

G 「そうすると私たちの物の見方は邪見であるといえますね」

D 「邪見を^{まぬが}免れないのが凡夫ではないでしょうか。ですから煩惱を起こしてやまず、それで悪衆生といわれるのです。この邪見で阿弥陀仏の本願に向かいますから、本願念仏を信じていることができないのです」

G 「傲慢といわれるのは」

D 「邪見をつのり、阿弥陀仏のご本願に対して自分の考え（邪見）をおし立てようとすることです」

G 「阿弥陀仏の本願の思し召しを素直に受けとらず、自分の邪見をさしはさむのですね。でも私は本願を聞いて、^あ敢えて自分の考えを立てようともさしはさもうとは思っていないのです」

D 「実は意識するとしなやかにかかわらず、本願をただ単純に信受していないところにはすでに我が心の邪見傲慢が本願を前にたちはだかっているのです」

G 「それは具体的にはどういうことでしょうか」

D 「弥陀の本願は〈助からぬ汝を、そのままなりで助ける〉との思し召しですが、それを聞かせていただいても、〈自分はまだなんとかなる〉〈助けてもらう必要は今はない〉〈もう少しよく考えてから〉

など、本願を無意識的にはねつけているのです。それは自分がこのままなりで助けていただかなくてはならないほどの助からぬ存在であることが知られていない、いわば〈私は私でなんとできる〉と自分を買いかぶっているのです。すなわち傲慢だからです」

G 「私はそれほど困っていない、まだ何とか自分で自分を始末を付けることができますと思っているのですね。だから〈我が名を称えよ〉の大悲心が分からないのですね」

D 「ええそうです。自分はまだ大丈夫、自分は自分でまだやれている、と思っているのは我が身が本当は極めて困窮していることが分からないからです。自分の傲慢な思いにたぶらかされているといっているのでしょうか」

G 「自分の困窮しているすがたとはどんなすがたでしょうか」

D 「まず無常の身です。私たちは本当は危ない身なのです。まだまだ私は大丈夫、これから自分を少しづつでも何とかしていける、と思っっているのですが、明日のいのちの保証はありません。そういう私たちのすがたを經典では、燃えている家の中にいながら、そうともしらず火のついた家の中で遊びほうけている子供のようだたとえられています。あるいは真つ暗な海に放り出されて今にもぶくぶくと沈みかけているような存在であると。ですから阿弥陀仏は急いで私たちの処にきて、〈我をたのめ〉と手をさしのべておられるのです。けれども私たちは〈間に合います〉と大悲の手を払っているようなものです」

G 「他には」

D 「自分の心を自分で変えることができると思っっているのですね。これが傲慢のすがたです。煩惱を自分で浄化できるように思ったり、聞法すれば、念仏で助かる道理が分かるようになると思ったり、浄

土がハッキリするようになると思ったり、自分の聞法の力で疑いが取れて信心が生まれるように思っています。自分の心の中に助かるようなタネやらしるしができるように思うのです。ですから〈助からぬお前をまるまる助ける〉と大悲をもって喚びかけたもう本願のお心を聞いても、〈こんな私のためでありましたか〉と受けとれないのです。信樂受持できないのです」

G 「では信樂受持^{しんぎょうじゅうじ}はどこで可能なのですか」

D 「それはむしろ、私の力では信樂受持はとてできない身であること、私では信じてことは到底不可能、それこそ真に難中の難で信じてことなできない身である、と知らされること。そこにはからずも、すでに私を〈助ける〉と呼び続けておられた弥陀の本

願念仏に気がつくのです」

G 「すでに私はお助けの喚び声の中にいたのですね」

D 「ええ、そうなんです。それなのに聞法しながらも、自分でどうかしよう、なんとかならう、なんとかなれると、逆さまに聞いていたのですね」

G 「この正信偈のお言葉によって、信心は難中の難で、本願を信じていること不可能な、助からぬ私であると知らされるのですね」

(了)

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(金) 午後二時始

講師 藤枝宏壽師 (福井県越前市)

信心夜話

『一蓮院談合録より』(4)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カ
ッコ内は私の所感)

如来様が、助けてやるきつと助けてやる、案じるな、心配するなと仰せらるるに、いろいろ小言ばかりを云うておる。そんなことが如来様の御機に契かなうであろうか。

(現在は、情報化社会といわれ、新聞雑誌はもとよりテレビやネットで、言葉が洪水のように飛び交っている。そういう状況の中では、言葉の重みは非常に軽くなってしまう。また人間関係は言葉によってコミュニケーションをとっているが、自分自身の言葉ですらあやふやが多いので、必然的に他者の言葉もそれほど真実性があるとは思っていない。だから他者からの言葉をそれほど真剣には聴かない。それが日常茶飯事ちはんじとなっている。そういうように言葉が氾濫し、言葉が軽く取り扱われる中では、阿弥陀仏の本願の言葉を聞かされても、それを非常に軽く受けとってしまう。しかるに、覚りの智慧から説かれた仏様の本願の言葉を聖人は「誠なるかな、撰取不捨の真言」と感謝し讃歎されている。「汝をきつと助ける、必ず助ける、心配するな」という

撰取不捨の仰せこそ誠であり、偽りのない真実の言葉であると仰せられるのである。南無阿弥陀仏の御名はこのような大悲の

喚び声である。にもかかわらず、この言葉に順わず、自分のさまざまな考えを差しはさんでいる。阿弥陀仏の言葉よりも自分の思いを大事にしているのである。だからいつまでも如来様のお心になかないのである。私たちの心の奥の叫びは「助けて下さい」ではなかるうか。なぜなら私たちは死の闇に取り囲まれ、煩惱の心にかんじがらめになっているからである。このいのちの底からの叫びをすでに阿弥陀仏は知り尽くして下さっていて、法蔵菩薩となり願を發し修行して南無阿弥陀仏になって、「お前を引き受けて浄土に連れて行く。安心してくれよ」と喚びづめに喚んで下さっているのである。「助けて下さい」の根源的欲求と「助ける」の大悲のお心は、ああじゃやうじやの小言を云わなかつたら、おのずからぴったりと結び付くのである。即座に話が決まるのである)

* たのめとあるも、**雑行雑修自力**をすてよとあるも、**其のなりで助ける**と云うことを届けたいが為じや。

(阿弥陀仏が「我をたのめ」といわれ「我にまかせよ」と仰せられるのは、私たちにたのんだら助けるとかまかせたら助け

るといつて、私たちを困らせるためではない。(そのままなりで助ける)というお心を伝えんがためである。しかるに雑行雑修自力の計らいをして、ああならねば、こうならねばと、どうにもなれないのにならねばと思つて、いつまでも「助ける」との仰せを素直に聞かないのである。もつと聞いてハッキリさせようとか、深く自分の悪を知らなければだめだとか、なんとかすれば信じられるなどと、まだ自分をたのんでいるのである。そんな私に、「何を思っているのか、自力ではだめではないか、阿弥陀仏の方で全面的に引き受けるから、この弥陀にそのまままかせてくれよ、何もいらぬぞ」と仰せ下さっているのである。それゆえ「たのめ」とも「自力をすてよ」とも仰せられるのは「そのままなりで助ける」のお心を私たちに届けたいための言葉である)

《任職雑感》

著名な脳外科医であり脳科学者であるワイルダー・ペンフィールドの報告によると、
「神経外科医が患者の大脳皮質の運動領域に電極をあてて手に動きをおこさせ、その患者に「なぜ、手を動かしたか」と患者に問う時、答えはこうである。
「私は動かしたりしませんでした。あなたが私に動かさせたのでしよう」といった。

患者は、自分自身が自分の肉体とは別個の存在を有していると考えているといつてもよいであろう。」
患者の大脳皮質に電極を当てれば、脳

(ここでは運動領)は刺戟され、手が動くであろう。もし脳と心が一つのものであれば、脳が刺戟を受ければ、心は当然それに応じた心を起こすことになる。ここでいえば、手を動かす大脳皮質の運動領に刺戟を与えれば、「手を動かそう」という意志としての心が起こるはずである。しかるに実際はそうはならなくて、患者は自分は手を動かしたいと思わないのに、勝手に手が動くので、「なぜ手を動かしたのか」と患者が尋ねられた時、患者は「私は動かしたりしませんよ。あなた(外科医)が私に動かさせたのでしよう」と応えたのである。要するに私は手を動かそうとも思わないのに、脳の神経細胞に外から刺戟が与えられて、私の心に関係なく手が動いた、というのである。これは非常に大事なことを示唆している報告である。すなわち心と脳は別であること、すなわち自分自身(心)は自分の肉体とは別個の存在であることを示唆していることになる。

仏教では自己とされる(主体)は識心であるとか業識といわれる心であると説かれてはいるが、脳(肉体)と心が別であれば、肉体(脳)がその機能を停止しても、心はその働きを停止するとは断定できず、なお存続していく可能性があると言えらる。この実験結果はそういうことが云いうる可能性の一つの証左となるう。

《真宗入門講座》 《お勤め練習と正信偈の学習》

毎月十八日(午後六時半始)
担当 (副住職) 土井尚存